



くまもとグリーン農業

有機農業推進の取り組み

— 熊本県山都町(やまとちょう)—

熊本県 山都町(やまとちょう)

- 位置:熊本県の東部、九州の真ん中に位置。阿蘇の南側、高千穂の西側に位置。
- 面積:544.64平方キロメートルで、熊本県内で3番目の広さ。(東京ドーム11,652個分)
- 割合:山林・原野約72%、田・畑農用地約16%。
- 基幹産業:農林業(米、夏秋トマト、夏秋キャベツ、ピーマン、イチゴ、お茶、栗、椎茸、ブルーベリー等。)
- 標高:300メートルから1700メートルで、平地部との気温差は各月平均で4度ほど低く、準高冷地の気候。九州にありながら雪も降る冷涼な気候。
- 人口(世帯数) :15,094人(6,554世帯) ※H30.10現在
- 平成17年2月11日 合併して発足※上益城郡旧矢部町、清和村、阿蘇郡蘇陽町の3町合併

位置



「山の都」の特性を活かした魅力ある取り組み

森林資源を活かした産業振興

山都町の38,732haに及ぶ広大な森林では、住宅建材などへの利用を目的に木材の搬出が積極的に行われています。森林面積の約80%は人工林であり、バイオマス・動植物由来の有機資源としての活用など新たな展開が期待されています。

農産物ブランド化推進事業

豊かな自然の中で生産される農産物に付加価値を付け、山都町農産物の認知度を高めることを目的として、情報発信や新商品の開発、販路拡大に取り組み、山都町農産物のブランド化を確立する取り組みを行っています。

約40年にわたる有機農業の歴史

山都町では安心・安全な農産物を生産する環境保全型「地域循環型の農業」に先導的に取り組んでいます。近年、有機農業に関心がある人々の新規就農も増えており、町への定住促進にもつながっています。有機農業者



山都町「山の都」の山都町フェアの様子
農産物を使用した加工品を「適正な価格で売る」ための知識を得得し、「売れる農産物、加工品づくり」を行うための取り組みを、積極的に進めています。

により協議会が組織され、有機農業の推進、物産展や産地見学会など生産者と消費者との距離を近づける取り組みが行われています。

県内自治体初の

「くまもとグリーン農業推進宣言」

山都町では、2017年11月、熊本県が推進する「くまもとグリーン農業」に町を挙げて取り組むため、県内の自治体として初めて「くまもとグリーン農業推進宣言」を行いました。くまもとグリーン農業は、土づくりを基本に化学肥料や化学合成農薬の使用を減らし、原本の宝である地下水と土を守り育てる農業を広げる取り組みです。山都町では町内の青果、葉菜農家や飲食業者等へ協力を呼びかけることで、「くまもとグリーン農



産地見学会「人取収穫体験」

業」への取り組みを拡大していきます。

新規就農者への支援

国の農業次世代人材投資事業をはじめとした各種支援制度を活用し、新規就農者の増加を図っています。平成24年度からの5年間の新規就農者数は49名、64名となっています。

有害鳥獣対策

有害鳥獣に対処するため、計画的な防除期の設置や研修を行うことにより、被害の防止に取り組んでいます。また、捕獲した鳥や獣の肉骨の活用を推進するため、2017年にジビエ工房やまごを開設し、活用を始めています。

「食」×「農」×「観光」 ビジネスモデルの創出に 向けた「食農観光塾」

「食農観光塾」は、山都町の産業振興を図るため、各分野の若手リーダーを養成し、農業を軸として「食」「農」「観光」という視点で事業を提案し、地域をけん引する事業者を育成しながら実践に導く取り組みです。

山都町のような中山間地においては、大規模な農業経営により所得の向上を図ることは非常に困難です。そこで新規や風土を生かした加工品の製造や販売、さらには観光農園や農家民宿など、農業に付加価値を付けた農業経営を行ういながら、集落活性化などの組織化により集落の維持を図る取り組みが必要であり、そこには、地域のリーダーとなる人材が必要となってきます。

このような状況から、この食農観光塾では、農業を軸



ジビエ工房やまご
山都町木生にある工房では、地元県友会の方々から持ち込まれる豚や鶏を解体し、商品化する取り組みを行っています。

点とした「食」「農」「観光」を軸とした受け入れ体制の構築や、そうした地域のリーダーを育成し、地域とともに一体となって集落の維持や産業の発展向上を目指して実働する意欲のある人材を育成しています。

九州中央自動車道開通と、 九州のへそに位置する「地の利」

平成30年度には山都町の西側玄関口である北中島地区に九州中央自動車道の開通が予定されており、その数年後には矢部ICの開通が予定されています。九州の中央を東西に連絡する樞紐となる九州中央自動車道は、第2期高速ネットワークとして、大規模災害時の救助・物資の輸送や、緊急救命医療施設への搬送時間短縮につながる、金の道として、路線住民の安全・安心の確保に大きく貢献します。

また九州のほぼ中央に位置する山都町に高速道路が開通することで、観光入込客の増加や、物流の利便性が飛躍的に向上することが予想されます。山都町の産業が発展するよう、食農観光塾の取り組みを進め、官民一体となって受け入れ体制を整えておく必要があります。



山都町「山の都」の山都町フェアの様子
観光農園や農家民宿など、気候や風土を生かした、農業に付加価値を付けた農業経営を行っている農家も多く、観光客も多く訪れています。



食農観光塾をきっかけに設立された「(株)山都でしか」のメンバー



レストランバスの様子
食農観光塾をきっかけに設立された、「株式会社山都でしか」山都の食材を使った料理を提供するレストランバスの運行を主催するなど、山都の資源を活かし、「山都でしかできないワクワク」をコンセプトに活動しています。

山都町の有機農業について

- 1976年に「全国有機農業大会」が開催されるほど環境や安心安全な農産物生産に意識が高い。
- JAが有機農業に対し積極的な協力体制。
- 有機JAS認定者数が最も多い町(全国一か?)。
- 面積ベースでは全体農家の2.2%。全国的水準より高い。
- 移住者のうち農業移住の多くは有機農業を希望。
- 山都町としても高速道全線開通時(3~4年後)を見越し「有機農業推進」を町施策の3本の柱の一つとして位置づけ支援している。



有機農業に取り組む若者移住者



有機人参

山都町の有機農業について(課題)

- 後継者不足。10年後、20年後が継続していけるか不安。
- 少量多品目で、高いというイメージ。
- 地元で流通していない(有機農産物を買える場所がない。)
- 「有機農産物」の定義のあいまいさ(農家も消費者も)
- 知名度不足(有機農家が多い町なのに知られていない)
- 新規就農者の受入体制(農地、機械等)の充実。

山都町有機農業協議会について

町内には数団体の有機農業グループが、このグループ同士の垣根を超えた会「山都町有機農業協議会」が発足(平成15年)。

- 有機農産物や特別栽培農産物の生産に取り組んでいるグループや生産部会など10団体、約100名で構成。
- 平成16年から地産地消の推進と子ども達に安心・安全な農産物の提供を目的に、給食への有機農産物の材料供給を行っている。
(約4t/年、H29年度納品実績3593.81kg)
- 有機農産物フェアを開催し消費者との交流を毎年開催。
- こども野菜塾開催、ブランド米づくり活動、各種勉強会(SNSを活用したPR、BLOF勉強会、販売会等開催。)

※BLOFとはBio Logical Farming(バイオロジカルファームィング)生態系調和型農業理論のこと。有機農業は科学的に根拠を理解して行うことで、農薬不使用(防草、防虫)高品質、多収穫が可能となるという理論。



有機農産物フェア



BLOF講演会

山都町としての取り組みと今後

- ・熊本県の推進する有機・無農薬栽培など環境に優しい農業である「くまもとグリーン農業」にも先進的に取り組む。平成29年11月12日、町内におけるグリーン農業生産宣言、応援宣言者を2020件まで増やすことを宣言。
- ・平成27年度より山都町の農産物ブランド化推進事業を開始。ブランド化や都市部消費者への販路拡大事業。
- ・有機農産物の域内消費推進(商店街、道の駅、学校給食)
- ・有機農業プロジェクトチームの設置、推進。
- ・有機農業者の農産物実態調査、販路拡大事業。
- ・有機農業の技術継承その他



農産物ブランド事業を通じ平成28年10月岩田屋催事を通じ、福岡の岩田屋三越内青果店ある山都町コーナー。

・広報誌による 有機農業特集

平成30年8月より
町広報誌に「有機の
人」を連載。山都町
の有機農業の歴史
を取り組みとともに
紹介。現在4回連載。



有機農業の人

飯星さんは、昭和45年に矢部高校を卒業後、就職し、4年間勤めた後に実家へ戻り、農業を始めます。その時、矢部高校在学時の校長、児玉通雄さんから「兜らのをかせするから、有機農業をしないか」と誘われます。まだ彼の身でしたし、有機農業に切り替えはできませんでした。お米には消費をしていました。」

しかし、有機栽培米の需要は多く、1千世帯分が不足していました。

「当時は、消費者の「健康（えんのう）が条件でした。水田に作業に来てくれる人だけに、有機栽培米を販売していました。」

「今は、消費者との交流会ですが、以前は消費が少なくて、手休むと30万円は消費もいるなど、生産者を支える意識が強くあったのです。」

H30.7.4 アイガモ



H4 産 消費者との交流作業



H4.7.29 稲刈り（稲刈）講師 前田 飯星幹治さん

有機での米作り、最初は手で草取りをしていました。手の皮膚がむけ、妻の妙子さんとお互いに、

「有機農業を」もうやめようかと、続けることを迷うこともありましたが、現在、黒川の新さんと西子さん夫婦も同様に、同じく有機農業に取り組み始めています。

常に消費者と向き合ってきた飯星さん。

「有機農業のファンを増やさないといけないでしょう。山都町を好きな人、消費者を惹きつけなければなりません。」

次号「有機の人」は、栽培技術の確立と販路拡大に奮闘した村山浩一さんを紹介しします。



いいはし 飯星 幹治さん
昭和26年生まれ 野尻

「消費ばせんか」

飯星幹治さんの実父、時春（ときはる）さんは、昭和40年代に御岳農協（当時）の組合長をされていました。飯星さんがお米の有機栽培に取り組み始めた昭和50年代、時春さんは、農薬を使わずにお米を作ろうとする息子に「消費ばせんか」と声をかけます。

「ウシカが発生した時には、1反（10a）に3俵しかできない時がありました。」

しかし、平成3年からアイガモを入れるようになって、虫と草の問題は解決しました。」

平成2年の有機農業サミットで福岡の古野隆雄さんが、「アイガモ農法」による米作りを発表し、それを聞いて得る時には、アイガモのヒナを注文しました。そして、アイガモ農法を聞きに動きます。



H30.7.4 幹治さん、妻の妙子さん、農具の修理子さん、孫の幹力ちゃん

「アイガモが入ってから地域に活気が出てきました。よそから人が見に来るようになったのです。」

昭和52年に、旧矢部町で「第3回有機農業全国大会」が開催されるなど、早くから山都町では有機農業が盛んです。この有機農業に関わる「有機の人」を紹介していきます。